

昭和  
四十五年

五月二十三日

発行（毎月一回・十五日発行）可

（通第二五二号）

# 慈光

第二十二卷 第五号

目次

悲觀思想と信仰（二）	近角常觀	(1)
菊花のおもいで（三）	福島政雄	(7)
一道会の記（三）	榎原徳草	(11)
歎異抄愚考（三）	杉藤美代子	(18)
仏光を身にうけて	花田正夫	(22)

# 悲觀思想と信仰

## (二)

### 近角常観

世人、或は仏陀は無常觀を説き、キリストは罪惡觀を説く。無常觀から入るのは仏教であつて、罪惡觀から入るのはキリスト教であると論ずる人があるが、これは妄断である。仏教の問題とするところは生・老・病・死、憂悲苦惱である、即ち人生の内容そのものである。もう一つ云うたならば、煩悶懊惱である。古来から云うところの煩惱がそれである。今日では煩惱といへばその文字だけの意味を感じぬけれども、我々今日の有様は生死問題に向つて煩惱で満たされてるので、その煩惱を強く云えば罪惡である、罪惡即煩惱である。

さてこのように正しく人生の生死無常の有様が問題となつて来た時、これを究めんとすればする程煩惱が増して来る。人生にあらわれたる仏陀釈尊は、自ら憂悲苦惱にたえずして、王城を出でて後、これでもう安心だと落着かれたのではない。この問題を解決せんために求法(ぐほう)のあまり、当時のいわゆる哲学者を訪ね、種々の宗教の儀式

ようどう)である。魔といふは煩惱である。或は名利、或は愛欲すべての煩惱が起つて来て道のさわりをするのである。釈尊が今まさに王城を出でんとする時、大魔王が現われて「汝、出家するなれ、七日の後にこの印度全国は汝によりて統一せられ、附近の島々まで合わせて悉く汝の手に帰せん、止まれ、去ることなれ」と告げる。釈尊はこれに対して「私は決して俗的王位を貪るものでない、人生の俗的勢力は望まぬ、わが得んと欲するものは精神上の王位である。私は仏陀となりて数千の世界をして歡喜のためにはばしめんことこそ望ましけれ」と答えられた。

これは釈尊が人生の問題について答えて、いよいよ人生の方へ出るか、人生の根柢まで深く進むかといふ釈尊の胸中の方向を云うたものであつて、釈尊はこの時断然悪魔の言を斥けて城を出られた。その時悪魔はあくまで汝の成道を妨げしと讐言(ようげん)した。はたして六年の後、成道の時に及び、いよいよ悪魔の障礙がつよくなつた。最後に空中におおいかれたる悪魔は大疾風を起し、大雷雨を下し、燃ゆるところの火の山をぶらし、恐るべき種々の武器をぶらし、火炭を投じ、燃ゆる灰を下し、熱砂を降し、燃ゆる泥をもつて攻めた。これはこれ八万四千の煩惱が、非常のすさまじき勢をもつて迫つて來たので、「濁世の起悪造罪(きあくぞうさい)」は暴風駆雨(ぼうふうしう)にこ

とならず」というもこれと同じことである。

釈尊はこの如くすべての苦をもつて心をおおわれた。私は必ずしも悲觀せねばならぬとは云わぬが、漸々人生の問題に気がついてくれば、こうなるということは事実である。釈尊は今の如く胸中の大奮闘の最後において、濃き闇黒が四方より包んで来た。

その濃き闇黒に対し非常の慈愛の光を以て向われたために、闇黒も退き、さすがの悪魔をも降伏してしまつた。悪魔の去つたあとには釈尊の胸中には非常の光明があらわれてきた。この時反復きわめ給ひたる思想がかの十二因縁である。十二因縁とは、無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生老病死・憂悲苦惱の十二である。この最初の無明というが即ち闇黒である。自分の闇黒が原因でそれからいろいろの悪行に出する。行業(ぎょうごう)ここに尽きず、ここに意識あり、識より形色(きょうしき)と名目(めようもく)とを生み、次に六根六識に感じ、これに触れ感覚をおこし、愛欲知覚を生じ、執着し、迷惑の存在を來だし、生老病死、憂悲苦惱の人生の苦悶、ついに尽きることのないもの、これ實に十二因縁である。

老病死は釈尊出家の當時からの宿題であつて、その本源は無明闇黒である。この無明の闇黒がとれると、十二因縁の連鎖が次第に解けて、天真獨明の胸中に、言うべからざ

を行ひ、非常の苦行まで試み、この煩惱を脱すべき光を見るまではやまと、非常な勢いをもつて奮進し給うたのである。世人は釈迦はその当時のバラモン教が弊害に満ちてゐるのを見て、これを改革せんとして起つたのだろう位に云つておるが、決してそんな大事業を為さんとかいうような考えではなく、ただ自家の生死無常、憂悲苦惱を解脱(げだつ)せんがために、何も彼もことごとく試みて見たが、それらのすべてが解脱のためには何の効果もなかつたから、遂にそれを捨てて、菩提樹下に端坐して、静觀思惟したまうた結果、最後に廓然と大悟せられたのである。法然上人、親鸞聖人などの信仰に入られたのもまた同様であつて、いわゆる聖道を捨て万行をさしおくというのも、自分が行うてみて何等の光も出て来ぬから、さしおかざるを得ずしてさしおかれたのである。

さて釈尊の六年、もしくは十二年の長い苦行の最後は何をもつて終つたかというに、いわゆる降魔成道(こうまじ)

老死輪廻の根元をきわめて元祖に以てと、並林といひ。

◎ 檜廻 御法の法をもとと利潤すればと施病石にりをもと 痘瘍といひ。

これは大慈大悲が起り来つて、三界は皆これ我子なり、といふ状態となつたのである。このように無明より行を起し、識を生じ、乃至老病死等を生ずる次第を順々に観じ来るのを十二因縁の順觀といふ。

病死等を生ずる次第を順々に観じ来るのを十二因縁の順觀といふ。無明亡ぶるときは行ほろび、識亡び、乃至老病死等一切迷妄を悉く亡ぶることを次第に観じ去るを十二因縁の逆觀といふ。

釈尊は成道の前夜、この十二因縁の順逆両觀を繰返し、繰返し味われたが、多年の悲觀思想ただちに解け来つて大覺の境界があらわれた。即ち翌朝、曉の明星輝く時に大光明を放つて成道し給いたのである。起信論で云えどその仏の大覺の境界が本覺であり、真如である。その本覺の境界をいつ迷いはじめん、無明の覆つたものであるから人生が悲しく苦しき境になつた。そこを『起信論』には忽然

(こつねん)念起るを名けて無明と為すと云い、いよいよその根本たる無明が解けおわったところを始覺と名づけたのである。むずかしき『起信論』も実驗の味いから云えばこれだけ尽きる。この最後の大覺の境は、人生問題の解け了つた最後の境である。仏はこの境に我等を導かんがために現われたのであって、この如く相対界の衆生を、絶対の仏の境界に引き入るが、宗教の本領である。

釈尊が成道以後、たちに、ベナレスに行き、五比丘の

さてその苦しき人生は何より起るかといふに、その原因を尋ねれば無明が原因である、人生的煩惱罪惡が原因であると説くもの、即ち十二因縁の順觀が集諦である。

その暗黒の無明が滅するならば、行も滅し、乃至、老病死も滅する。一切の苦の滅しおわりたるところで、本覺明了の光があらわれる、このところを教えたのが滅諦である。

そうするには眞実に仏道を修するにありといふのは、道諦の説法である。これ釈尊自身の経験し來りたる人生問題の解決を人に伝えたまいし形式である。

さて再び人生問題にもどつて云えど、かの源平の時代は一世ことごとく煩悶におちいり、苦しみの極に達しておる。私は今年四国高松に遊んで、その道に須磨・明石を過ぎ、転じて讃岐の屋島の古戦場に出て、往年源平大いに戦うた悲惨の跡を見て非常に感じたことであるが、この如く

屋島に、壇浦に平氏は滅び、日本国民が悲惨なことに重ね重ね出遇うて苦しんでおる時に、法然上人は盛んに信仰の光を輝かして下されたのである。法然上人は出家以来しきりに求道のために心を碎き、種々にがき経験をへて最後に黒谷の報恩藏に入りて、心血をそそいで一切經を読み、善導の『觀經疏』の「一心專念弥陀名号」の文にいたつて、初めて絶対の光明を見て、嗚呼人生は實にこれである、如何なる事を修し試みてもすこしも我が心の安んずることはなかつた、我が如き十惡愚痴のもの、ただそれ仏陀慈悲の力によりて救われるるのである、實にこの念佛は一世の闇黒を破る唯一の靈火であると、大いに喜ばれて、それより後は、自行化他ただこの念佛のみを専らとせられた。

親鸞聖人もまたこの時代の児である。九歳の時に求道の切なる心を起してより、漸く深く経験し來り、十九歳の時に河内の國、磯長(しなが)の聖徳太子の廟に参籠しては、「汝の命根まさに十余歳」の靈告を蒙りて、ますます人生に切詰めた考をもつて、一日も片時もじつとしておらず、しきりに求めた最後に、二十九歳の時にいたり、法然上人の経験を聞き、「南無阿弥陀仏、往生之業、念佛為本」の教化によつて大安心を得られた。

法然上人の教化によつて大安心の地位に立たれたものは、親鸞聖人ばかりではない。その当時、坂東一の武者、四の

釈の轍頭(はたがしら)たる熊谷直実も念佛によつて救われた。また家門のための戦争とは云いながら、聖武天皇の御建立に成れる帝綱重々のビルシヤナ法身の靈像たる、奈良の大仏を焼いたといふ、平重衡(しげひら)も念佛によつて救われ、一世の達眼者たる藤原兼実公も、上人の『往生要集』の講説には、涙を流し冠(かんむり)を地に落して感泣した。又放火・強盗等兎悪をきわめたる耳四郎も、一声十声の念佛にて往生するぞと聞いて、仏陀の恵みの広大なるに感じて念佛を喜んだが、後に不思議の現世の救済を感じて全く改心の極に達した。この如く上下貴賤ことごとく念佛に帰し、鎌倉時代暗黒の一世がことごとく仏陀の光によりて救われた。

前來のべ來れる如く、仏教の初門は悲觀厭世にはじまることは事実であるが、さりとてこれが決して仏教ばかりではない。キリスト教にありても遁世的氣風が中世紀においてすこぶる盛んであった。フランスの如きは、清く貧しく且つ從順なれと教えて、金を持つなどのことは絶えてなく、無妻独身主義で、至極優しく、すべて慈善の行為は何にてもこれを行つという風であった。すべて宗教が人生を深く経験せんとして、苦行主義にまでおちいるのである。

この如く深き経験を為す所為のものは、大なる悟りに至らんがためである。すべて宗教の一面は大いに遁世的であ

つて、一面は大いに人生の上に活躍する。大いに遁世的な所以は大いに人生に活躍する所以である。

釈尊成道のはじめ先ずアラカラマ仙人を度せんとしたるに、彼がすでに世を去って在らず、よって直ちに阿若矯陳如（アニヤキヨウチンニヨ）等の五比丘の處に向い給うた。かつて五比丘は釈尊求道の友であった。釈尊は五比丘を度しおわって、次にかゝって約束のあつたビンバシヤラ王及びその国民を教化し、それより故郷のカビラエに帰りてかゝての妻ヤシユダラ、かゝての子ラゴラ、弟ナンダを度した。この如く全印度中に光を持ち来したのが釈尊である。最後にこの仏陀の光は印度より支那におよび、朝鮮半島より日本まで救うた。このように信仰の光りにより人生に帰り来りては、かつて生は苦し、老は苦なり、死は苦なり、人生ことごとく皆苦しと悲しんだものが、一転して今度は無生無滅の世界となり、かつての憂悲苦惱は常樂涅槃の味となり來るのである。

かくて云えども信仰に入れば無常の感じもなく、生死といふこともなくなるかといううに、源信和尚も煩惱即菩提なりと云いて「惡をばからぬものはあれども、生死即涅槃なり」と云いて平氣で死ぬものはないぞと呵責（かしゃく）せられたる如く、生死を忘れ煩惱を顧みぬのならば、それは真の信仰でない。親鸞聖人の信仰は安心の境界の處に直ちに

より外に仕方がないと目の覚めた時、仏陀慈愛の手をもつてしつかとつかまえて落ちぬようにしていて下さると気づいて見たら、これが眞の宗教の罪惡觀である。ここをば善導大師は「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し、常に流转して、出離の縁あることなしと深信す」と言われた。ここに至つたときは最早悶えておるのではない。自分のことがすっかり分つて、人生の底の底まで分つて、何等力のないものが、全く仏の御恵みによつて救わると安心したのである。このように仏陀の眞の光りの出來た時は、煩惱ありながら救われる。煩惱の在る中に仏の恵の下で働いているのである。源平時代の大煩悶においては、いよいよ仏陀の光に救われて、文永弘安の役の如き、深き自信を有せる大活動に出でたる如きは大いに注意すべきである。

なお一步進めて云えども、宗教としての人生はなかなか大なるものである。宗教の最終は肉体己上に出でて、死後にいて広大の世界の開けて来るところが宗教の特色である。この人生の終り至りてその理想が実現するが宗教の最終の理想である。それが即ちいわゆる極樂無為涅槃である。釈尊は三十成道の時に涅槃の境があらわれた。しかしこれは涅槃に違ひないが、肉体ありながら大平和の境である。それより四十余年の活動があつたが、それは涅槃界のはじま

「明日ありとと思う心の仇櫻」の感じを持ち來つて、人の命は草上の露なれば、何時如何なる縁によりて死ぬやら計り知られぬが、しかし生死無常のその中に即ち仏陀の光明がある。信仰の眼中には生死に苦しむということではなく、大安心をして居りながら、常にまた出す息は入るを待たぬなら、いと知りて、油断なくしかも悠久とこの無常の世界に活動して、命の終るとともにおもむろに涅槃界に入るのである。前の無常の観念は、生死無常を憂いて問題としたのであるが、今の無常觀は無常の上に常住の光を認めてこれに安心するので、そこが信仰である。又罪惡の方でいうても同じことで、ただ自己の罪惡の深いのに驚いて、それに苦しんでおる間はいまだ罪が救われておらぬのである。トルストイ氏の譬に、寝台の上に安泰に寝ていたものがいきなりすべりかかって、見れば万仞（まんじん）の懸壁にするずる落ちて行く。これはたまらぬともがいて、手に触れるもの何でもつかまろうとしておる間は、永く安心することは出来ない。しかるにもうかなわぬと思つた時、何ぞはからん真の親がしつかりとつかまえていてくれたのであった。こう気がついて見たら落ちたくも落ちられぬと云うておる。今またしかり、自分がすこしでも善くなりたいと思う間は善くなれると思うのである。善くなろうとする間は永く安心は出来ないが、いよいよ善くなれぬ、落ちるによる外に途なしと深く信するのであります。

りである。親鸞聖人も信心の一念に即得往生ではあるけれども、本眞の涅槃を得るのはいよいよこの肉体が捨てられて実現するのだといつておられる。この世界において信仰の光にてはらくだけで、死んだ先に宗教の力がないならば、宗教も甚だ小さいものであるが、宗教の世界最高の理想は死んだ以後において開くのである。

自分で苦しい経験をして來たものが、いよいよ自分が安心の地位に入りて後は、政治なり、実業なり、文学なり、又直接の伝道なり、あらゆる方便によりて人をも同じ安穏の境に導かずには居られぬと同じく、涅槃界の極処に至りては、猶更もってその眞如一如の境界より、生死煩惱の園林（おんりん）に出て來るのである。諸仏が一如海より出で來つて、一切を救うが如く、我々も涅槃の境界に入りては、是非共この人生に出て來つて、觀世音菩薩の普門示現（ふもんじげん）の如くすることが出来る。これはいわゆる還相廻向である。かくまで大なる希望を持つことになつては、悲觀におちいるなどということはあるべきでない。よりて私は現代の悲觀思想を救うには、この偉大なる信仰による外に途なしと深く信するのであります。

# 菊花のおもいで

福島政雄

(四五・四・九)

一株の菊の花が庭に咲き出でて去年の秋を飾った。それは六月の頃に苗をもらつて植えておいたのが、他の幾本かの苗は虫がついたり踏みつけられたりして生い立つことが出来なかつたのに、此の一株だけがまづまづ無事に育つて花をつけるようになつたのである。無事育つたと言つても、それは不思議に無事に育つたのであって、その育つ間に私は肥料も施さず、何の手いれもしなかつた。それが兎に角育つて花が咲いたのであるから、私はその花を見ながら色々の感じを起さずには居られなかつた。

おもえは既に六十年に近い過ぎし日のことである。私が二十歳前後であった頃、私の父は毎年丹精をこめて菊を育てていた。それは父が女学校長をつとめていた頃のことである。校長宅の庭で父は花壇を急入りにこしらえて、春の根分けの頃から熱心に苗を育てた。その菊は熊本流の菊であつて世間で多く見るよくなしつこい八重咲の菊ではなく、清楚

みを持っていた。

此の父の楽しみの世界を其の頃の私は少しも理解することが出来なかつた。それほどに私は浅薄であつた。或る時は父に向つて、春から秋までかかつて菊を育てても、花の咲く間は僅に十日ばかりではありませんかと、いうようなことを言つたことがある。父は私を叱りはしなかつたが、併しよほど不愉快に感じたに相違ないと思う。六十年後の今日になつて私は自分の浅薄なことに気がついて、あの時なぜ父に向つてあんなことを言つたろうという慚愧のおもいが湧いて来る。自分ながらあまりに情ない自分の心だとおもう。父が世を去つて既に四十五年おわびも出来ない。私はこの事を想い起すと衷心が淋しくなつて何とも云えない心持になる。ああ私はなぜに父に向つてあんな浅薄なことを言つたろうと後悔する。

如何ばかりお手間かかりし菊の花

此の頃の私は菊の花に対しても此の句をしみじみと思うようになっている。菊の花は私である。父は私を育てながら菊の花を育てた。中学教員で、しかも大学出身でもなかつた父は、教員としての地位も相當に薄遇であつて、校長になつても待遇はお話を知らないほど低いものであつた。そんな貧しい生活の中で父は六人の子供を育てた。兄が幼くして死んだので私は父の跡継であつた。

な单弁の菊花であった。それを三列に植えて、その色も赤、黄、白、赤、黄、白というような配列の順序があつて整然と植える。肥料の施し方がなかなかむつかしいのであって、後列の菊が最も丈高く、中列は中位の丈になるように、前列のが最も丈が低くなる様々に肥料を施すのである。肥料は油糟を水で腐らせてその水を薄めたものであつた。父は相当に忙しい校務の傍、毎日菊の手入れを怠らなかつた。春三月の根分けの時から秋十一月の花の時に至るまで熱心に世話をして菊を育てた。それは花の時だけを楽しむのでなく、その育てて行く一日／＼が如何にも樂しいのであつた。夏の暑い日にどんなに疲れた時でも父は菊花壇の手入れを怠らなかつた。時には私に灌水を命ずることもあつたが、大ていは自分で水をそそぎ自分で草をとつた。春から夏、夏から秋とうつり行く季節は父にとつては菊と共にうつり行く季節であった。父はそこに無限の樂しみを感じた。

六人の子供を育てるのは如何ほど父は苦心したことであろうと、今の私は今更のように考へる。「如何ばかりお手間かかりし菊の花」の菊花は私のことである。

父を亡くした後の私は、生みの父母のいのちの上に久遠の仏陀のお慈悲を感じるようになつた。私が私の父母の子として此の世に生れ出でるまでに、久遠眞美の仏陀のお慈悲のお哺（はぐく）みは如何ばかりであつたろう。久遠劫來の流転の此の身が此の世に生れてお慈悲に目ざめるようになるまでには如何ばかりお手間がかゝつているのであらう。私はその事を自分の深刻な煩惱の上に感する。久遠劫來の宿習である私の煩惱をあくまでも融かして軽じ尽さずには止まないという仏陀真実の御いのちに触れて念佛申すようになつた私のために、まことに如何ばかりお手間がかゝつてゐるのであらうか。一株の菊花に対しても私は實に感無量である。

如何ばかりお手間かかりし菊の花

此の一句が私の心にしみじみとなつてくる。

我が庭に花咲く一株の菊花は万株の菊の開花を告げる。日本國中は言うまでもなく、西洋の国々までの菊花は此の時に花咲く。一株の菊の花には千万株の菊花のおとづれが籠っている。そこに私は無限の意味を感じる。

或る人が親鸞聖人は一切衆生に信をつたえる人であるのに「親鸞一人がためなりけり」と言われるはどんなことであろうと私に尋ねられた。なるほど理窟から言えばそんな疑問も出るであろう。併し一輪の菊花に千万の菊花のおとづれがこもるならば、親鸞一人のよろこびに千万人のよろこびがこもるのである。况んや聖人は一切衆生と共に苦しみ共によろこぶ人である。

一人ゐてよろこば三人とおもふべし。

二人ゐてよろこば三人とおもふべし。

その一人は親鸞なり。

此の御臨末の御書は、たとい聖人が御自分で書かれたものでないにしても、聖人の御心持をよくあらわされたものと思われる。

此の頃私は白杵祖山先生の「自然法爾」を読んでその中に次のような一節を発見した。

精神的方面にしても物質的方面にしても、一滴の水、一粒の米、一片の紙、又一念の心、刹那の心い、そこに天地全体の恩徳がおさまりて、一滴、一片、一粒となり三世十方の靈徳がそなわりて、一念一刹那の思いともなつて居ります。されば私は天地全体中の一部分でなくして、天地万物の全体が総合され私の一身一体となつて居ります。又三世十方の衆生中の一人体でなくして、十

と自ら考へてゐる者が必ずしも他人を生かしてはいない。ただ自分一人の道を深く進んでゐる人が億々の衆生の心をよびさます。自分の心の問題を棚にあげて他人の為につくすなどというのは空虚な叫びに過ぎない。併し自分と他人とを別々に考へるのではない。自分の問題が深くなるほど一切衆生の問題がその中に含まれる。親鸞聖人のためといふ言葉の奥には一切衆生が含まれてゐる。そして一切衆生は如來の願力の中におさめ入れられるのである。

一輪の菊の花が開くのにも因縁がある。菊の花は偶然に開くのではない。「如何ばかりお手間かゝりし菊の花」である。無限の因縁、それは私どもの計り知ることの出来ない因縁である。また私は父の菊花壇のことを考へる。菊の花はその生命の遠い因をその中に持つてゐる。それに日の光や適當の土壌や肥料や灌水や、八箇月にわたる父の手入れが縁となつて十月十一月に菊花が開くようになる。これだけを考へても如何ばかりお手間かゝつたということがわかる。况んや私などが計り知ることの出来ない無限の因縁はどんなであらう。一輪の菊花に無限の因縁がこもつてゐるのである。

併し仏陀のさとりの世界は因果を超えてゐると言われるそこには因縁果の関係が消滅すると言われる。これはどんなことであろう。私には仏陀のさとりは開けていないからわからぬと言えばそれまでである。併し仏陀の智慧の光を

方衆生の全体が総合されて私の一心一念となつて居ります。祖師聖人が「弥陀の五劫思惟の顔をよくよく案すればひとえに親鸞一人がためなりけり」と信嘗（しんじょう）したまることは、親鸞一人といふ一身一体、又心一念は全く五劫思惟の総合体であるに感激されたそれが一時的でなく聖人一代の報恩生活の表示であります。これは聖人の生命一つに一切衆生が包容せられていることを述へられたものと思う。

聖人一人が弥陀の五劫思惟の願に感激せられることはやがて一切衆生が感激するという事になる。その一切衆生の一人／＼が目ざむれば各々五劫思惟の願を我が身一人のためであつたと感ずる。この感じの中において一切衆生は互にひびきあう。宗教的感應の微妙の味わいがそこにある。聖人という一輪の菊花は開いた。それは「御名より聞く信心の花」である。お念佛称名の菊花である。如來の御まことを我が身一人に受けた御名をよぶ信心の花である。此の一輪の菊花が開いたことによつて億々の衆生の信心の菊花が開いたことによつて億々の衆生の信心の菊花である。聖人という一輪の菊花は開いたことによつて億々の衆生の信心の花である。お念佛称名の菊花である。如來の御まことを我が身一人に受けた御名をよぶ信心の花である。此の一輪の菊花が開いたことによつて億々の衆生の信心の花である。聖人という一輪の菊花は開いたことによつて億々の衆生の信心の花である。

人間の心の間係はまことに微妙である。他のためにする

我が身に受けている。智慧の光は尽十方無碍光である三世を貫ぬく光である。それは因縁果の世界を照徹して末の末まで徹して行く。それ故因縁果の支配を受けず因縁果を融化し統一する。即ち万物が流転生滅しているその姿の上に常住を觀する。いわゆる花は咲きつつ散りつつ常住であると觀する。此の仏陀の智慧の光に照され、仏陀の生命の眞実性が我が身に徹して來ることを感じる私どもは、その眞實性に触れた故に流転生滅の間に安住する心の余裕が出来てくる。かようになれば因縁果の中にありながら因縁果を超える心を廻向せられいただいて行く。仏陀の絶対他力が徹して來るので、因縁果はありながら心はわざらわされず、仏心をこの身にいただく。そこに念佛がある。念佛の中には此のようない世界が開けて來る。そこに育てられたるものに永遠に此のようない世界が開けて來る。それ故純真な念佛者はどんな逆縁に出会つても結局は自分の境遇に感謝する心を失わないのである。

一輪の菊の花は秋に花咲きやがて萎（しほ）んで枯れて行く。併し常住の生命は冬を通じて春に至る。久遠眞実の生命はそこにもはたらく。そこに育てられたものに永遠に美しい光の返照がある。此のようにして菊花は咲きつつ枯れつつ常住眞実の生命に哺まれて行く。人も亦このようにならぬとあるその意味もほのかにわかるようにならぬ。

# 一道会の記 (三)

榊原徳草

引続いて松本解雄先生は次のようにお話し下さったのでありました。

一道会にお参りさせて頂き、何か今までにないような感激を只今持つてゐる所以あります。昨晩も榊原先生とお話をしたことでした、丁度池山先生が御往生になつて一週年の時に、皆様から玉稿を頂いて先生の追憶録を編集したのでありました。が、奇しくもこれを『呼子鳥』と命名し、榊原先生が題字を書かれたのでしたが、今日しも池山先生を通じ、親鸞聖人を通し、又御仏から「呼ばれているんだな！」と云う実感と云いますか、そんな気持がするのです。榊原先生が先程、一期一会といわれましたが、本当に一期一会の感が深いのであります。特に今回は西元先生がアメリカやカナダの第二世の留学生の方々も引き連れられて参会されましたし、又、四国、九州、関東からも御縁につらなられて有難いことあります。生意氣を云うようですがこういう御縁につらならせて頂いて、生命をながらえている有つた。

昭和六年秋十一月、信仰篤かつた林田睦子夫人が若くしてこの世を後に浄土に往かれた。東山女專を中心として多くの若い女性の間にみ仏のみのりを弘められた夫人を突如として失つたことは、私達にとって實に大きな悲歎であつた。この大きな悲しみが今はなき池山先生の上にも拝された。それは密葬の日であった。先生には礼装で今の大谷大学のグラウンドの東の方にある林田さんのお家へ来られおねんごろに仏前に焼香礼拝された。やがて靈柩車は一必ず鳥丸通りの方へ行き、花山の火葬場へと向つた。その時先生には車が見えなくなるまで直立されたままでお見送りして居られた。あの時の先生のみ姿は何故か私には何時までも忘れられない。かつて御講演の中でお聴きした、野戦場で主人を失つた忠大がヂッと故國の方を首を長くし、悲しい眼付でみつめていた、その場面と何だか相通うものがあるように思われて仕様がない。場合が全く相反していたにもかかわらず。

もう一つ忘れ難い印象を述べよう。それはさる年の三月のある日、奈良市の淨教寺へ御講演に行かれた時である。うち曇ったその日は馬鹿に寒かった。恐らく寒さはこの上もなくお嫌いであったと思われる先生が、控室の小座敷で火鉢を囲んでいられた時でさえも、むしろお氣の毒に思わ

ガッコー

こと

引続いて松本解雄先生は次のようにお話し下さったのでありました。

一道会にお参りさせて頂き、何か今までにないような感激を只今持つてゐる所以あります。昨晩も榊原先生とお話をしたことでした、丁度池山先生が御往生になつて一週年の時に、皆様から玉稿を頂いて先生の追憶録を編集したのでありました。が、奇しくもこれを『呼子鳥』と命名し、榊原先生が題字を書かれたのでしたが、今日しも池山先生を通じ、親鸞聖人を通し、又御仏から「呼ばれているんだな！」と云う実感と云いますか、そんな気持がするのです。榊原先生が先程、一期一会といわれましたが、本当に一期一会の感が深いのであります。特に今回は西元先生がアメリカやカナダの第二世の留学生の方々も引き連れられて参会されましたし、又、四国、九州、関東からも御縁につらなられて有難いことあります。生意氣を云うようですがこういう御縁につらならせて頂いて、生命をながらえている有つた。

今日は『呼子鳥』の中に書きました私のものを読ませて頂きます。

私は池山先生に初めてお目にかかるのは、先生が大谷大学教授として京洛の地に来られてからで、時は昭和四年の春、騒々しい花見時も漸く過ぎようとする五月のある夕べ、二条寺町の鎧屋の二階でさざやかな歓迎会を催した折であった。鎧屋の露台で暫くお待ちしていると、先生はステッキを振り／＼ゆつたりと奥様と河原町の方から歩いて来られました。あの時いかにも落着いた歩みはそれから十年間、否先生の御一生を貫した足どりであったと考えられる。それ程その時の先生の歩調は印象深いものであった。しかもその後先生のお話も度々聴聞する御縁に恵まれたがその都度、最初の夕べに感じた先生の歩調と同じようなものを感じた。ゆっくりではあるが、その底に無限の力を藏せられて、聴衆に深い／＼感銘を与えておおかなか

難さをしみじみと思うのです。

今日は『呼子鳥』の中に書きました私のものを読ませて頂きます。

「私は池山先生に初めてお目にかかるのは、先生が大谷大学教授として京洛の地に来られてからで、時は昭和四年の春、騒々しい花見時も漸く過ぎようとする五月のある夕べ、二条寺町の鎧屋の二階でさざやかな歓迎会を催した折であった。鎧屋の露台で暫くお待ちしていると、先生はステッキを振り／＼ゆつたりと奥様と河原町の方から歩いて来られました。あの時いかにも落着いた歩みはそれから十年間、否先生の御一生を貫した足どりであったと考えられる。それ程その時の先生の歩調は印象深いものであった。しかもその後先生のお話も度々聴聞する御縁に恵まれたがその都度、最初の夕べに感じた先生の歩調と同じようなものを感じた。ゆっくりではあるが、その底に無限の力を藏せられて、聴衆に深い／＼感銘を与えておおかなか

れられた。やがて約一時間ばかりお話がありまして、もとの部屋に帰つて来られた先生は

「寒いですね、全く今日は、声が凍つてしまつて出ませんよ」

と。それでもお慈悲の風呂につかってニヨニコされながら話されたお言葉。声が凍るとはどんなことだらうかとフト考えさせられはしたが、実にうまい言いあらわし方だなと深く感じさせられた。あの時の先生のお言葉を思うつけ、当時のことがまざ／＼とよみがえつてくる。

先生が京都へ来られてから十年間、私達の信仰の集りである親鸞会——現在の大乗会（昭和十四年当時）——は実際に大きな御恩を及ぼした。或は樂友会館、或は顕道会館、或は聖鸞寮という具合に度重なる御法縁を思うにつけても、今はなき先生のありし日のおもかけが偲ばれて、ただ感謝の二字があるだけである。」

以上は或る日の先生の一部であります。

先程から諸先生のお話を承つて有難く拝聴して居つたのですが、これは、つまり只念佛して、という一句になるのであります。私、花田先生にお会いしたのが昭和三年、それがお念佛する御縁になつたのであります。生れは寺院ですが早く父にわかれ、それ以後十年間は全く灰色の日々であります。が、内氣な性質の私はそれを打

開けて救いを求める、といったことにならなかつた。それが幸いにして御縁、善巧方便と申しますか、寺に生れた、聖人の御教え、念佛、こういうところに何か、ギリギリの所で求める、というでなしに、平常聖人の教えを聞いている、そういうようなことで、別に求道的精神というようなことでなく、これが本当の教えではないかと思つていました。灰色の家に帰る気持も起らず、父を亡くした暗い生活のうちでも死を選ぶという心もおこらず、聖人の教えに支えられていました。

京都に出て勉学することになり、或は高倉会館でお話を聴いたりしていましたが、丁度その頃、花田先生が岡山医大を中退して京大に来られ、その導きによって、横田先生の寺に参りはじめて自分の煩惱熾盛の中に念佛が恵まれたのであります。

爾来四十年経過して今日に至つたのですが、仲々このお念佛というものが、口に称えるということ、保ち易い、称え易いお念佛がありますが、本当のお念佛を頂かせて貰うこれは「難中の難これに過ぎたるはなし」とあります。何故かといえば邪見惱慢の惡衆生、或は無眼人無耳人であるからであります。前にもお話ししたことありますが、

その話をもつて私の話を結びたいと思います。

先程、花田先生のお話に、仏智、般若の智慧とあり、これ

呼び続けたのであります。それで、野良で働いている母の所へ伝令を走らせました。

母は伝令を見るなり、これは息子の一大事だと気がついたのです。そこで伝令より早い位の足取りをもつて、野良着のまま病室に馳せつけました。息子は虫の息であつたが微かに母を呼び続けていました。皆はヤレ〜と愁眉を開いて、そこで母と子との対面となつたのですが、これが、あれ程慕い叫び続けた母であると、どうして伝えたらいよいかと、これには立派な医師達や、その外の方々もどうしようもなかつたのです。

「どうすることも出来なかつた、これは普通の智慧ではその通りです。ところがお母さんの智慧、子を思う母の智慧は、あたりかまわらず、懐ろをひろげて、そしてしほんだ母の乳房を息子の口にあててやつたのです。

地上において乳房をふくませる方は誰でしょう。本当に産んで下さったお母さんより無いでしょ。」（声絶える）

そこで、お母さん！と二声三声呼んで、この兵士は目的を達して安らかに息を引きとつたのであります。

これは日露戦争当時の実話であります。

私はこのお話を通じて、まさしく眼もない耳もない、徒ら者のこの私、煩惱熾盛、罪惡深重の私に、み親である仏が、南無阿弥陀仏の乳房をふくませて下さることによつて

はただ「唯念佛」であると言われました。これは阿弥陀仏は無限の慈悲、無限の智慧ということになるのでしょが、また「智慧の念佛」とも「信心の智慧」とも御和讃もありますように、これは全く有限の世界を超えた仏の世界からの智慧であります。

さて、日露戦争当時、北陸の一人の兵士、母一人、子一人の兵士が、あの二百三高地の激戦で敵弾にあたつて、両眼両耳がやられて、全く眼も耳も駄目になり、野戦病院に収容されたのであります。

重傷であつて生命の危険の状態でありましたが、その重傷の中から母に会いたいと呼び続けた、並み居る病院の人々も両眼両耳を失つたこの兵士にどうしてあげようもない耳が聞こえればここは戦地でどうしようもないこと、眼が見えれば書いてもそれを伝えられるが、それはいずれも出来ない。

しかも母に会いたいと呼び続けるこの兵士に、困りきつた軍医は、丁度大連の港から故国に帰れる病院船があつたので、よしんば途中で生命絶えても、一歩でも故国、母の居る方向に近づいて死ぬなら本望だろう、と決心しまして三人の看護婦に托して故郷へ向つたのです。

奇蹟的にもこの重傷の兵士は十日以上の船旅にも生命を保つて、故郷の金沢についたのです。そこでも彼は母を

本当に親子の名告りが出来る。

「親鸞におきては、唯念佛して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せ蒙りて信ずるほかに別の子細なきなり」。この「別の子細なきなり」の世界がみ仮の智慧によつてはじめて開けて、親子の対面、名告りが出来るのであります。

このように仏の智慧は絶対の智慧で、それがお乳となつて、念佛となつて私に注がれた、この遺る瀬ないお慈悲を思つとき、私は何も文句なし。力んでお慈悲をつかもうとしても、眞実の智慧の眼の無い者にどうして得られましょか。仏のおまこと、眞実、これを頂いて「念佛も申され候」であります。こうして私四十年間、お蔭様で元氣で皆様とお目にかかることが出来、これほど嬉しいことはありません。来年はどうか、お互に健康に氣をつけて、お念佛をよろこばせて頂きたいものであります。

（筆者註）

松本先生は、昨日から来泊されて、昨晩など互にそこはかとなく談り合い、会うた、それだけで心豊かになり、身もやわらかく、時に笑いに打ち興じ、お念佛の慈光に照らされて、御同朋、御同行の、全く「一つ」の味いに浴したことですが、その温まりの中から只今の慈光かがやく中、大悲の催すままに、生をうけ、念佛に遭うての赤裸々な

歩みとその法味を淳々と談つて下さったことは、一同の会衆の身心に滲透するお念佛の深いひびきがありました。

次に西元宗助先生のお話の大要は左の通りであります。先生は今までの緊張した空氣を和げるという温いお心遣いから朗らかな法味を、又どうぞしてこの御眞実に一人でも多く御縁を結びたいという願いからの真情を吐露してのお話であります。先生が買って出られたこのような大法宣流のきめ細かいお心遣いに胸塞る思いがしました。

私は立った方が話し易いので、立ってお話しします。今日、是非とも御披露したい方が沢山おられます。実は五月でしたか、榎原先生の御子息、弘樹さんと順子さん、ここにいらっしゃるのですが、それが私の所へ見えまして多年の間の二人が結ばれて……。恋愛関係かとききますと

そうしたこと。順子さんは大阪の高等学校時代にこの京都、淨住寺の寂けさを訪ねてこられ、そんなことが御縁のはじまり。とも角、秋の九月に結婚式を挙げるんで仲人をしてくれといふんです。私、大変嬉しかったんです。そんなわけで結婚式が済んで淨住寺に帰られて仏前に手を合せて礼拝したと、徳草先生に伺つて、涙の出る程嬉しかつた。今日、御二人参つて居られます。順子さん、弘樹さんスタンダップ。（笑声拍手）どうぞよろしく。

安孫子君はサクラメント大学の美術学部を出ておられる。あの大学には安孫子君の描いた絵、この襖の四枚分位のがある。絵は上手だし、その上陶芸もやられる。それが菩提心を発して開教使になるために日本に留学、四年になります。来年は帰国して開教使になられる。多分夏頃印度を廻つて帰られる。

次に柳原君（拍手）メキシコとの境にあるサンディゴの出身、在家であります。元々歯科医です、アメリカで収入の多い職業の一つは歯科医だそうです。それが発心してパークレーの仏教研究所で修学されました。まだ日本語は下手です。今年の春来られ、その前に結婚式をあげられ、奥さんも竜大と一緒に留学されています。

その隣りが柴田君（拍手）スタクトンの柴田師の御令息で、十人兄弟であります。お父さんはワイオアの立派な開教使です。まだ留学二年足らずです。

まあ、こう云うことであります。それならこれらの方がどうして来られたかと云うと、私、昨年ハワイに招かれ、一昨年はアメリカに。そこで感じたことは、足利淨円

それから、これも、お東の方、岩手県の釜石、宝樹寺の渡辺顯信さん、これも愛情で結ばれ、仲人は私が学園紛争で出来ませんでしたが、今日、お二人も見えております。渡辺君は大谷大学図書館の幹事、新婦は大学院の学生で英語が得意、ジャーダカ物語を訳されている。二、三日前に梅原真隆先生のお墓が出来るので、渡辺君が一道会には出られないといつておられた。それで私は、妻たる者はどこまでも夫について行くべきで、一道会には来なくてよろしい、私はそう申したが、今年は御縁が無くて氣毒だなあと思つたんですが、今日二人は来ております。御紹介します。お二人お立ち下さい。（立たれる。一同拍手）

それからその外に沢山紹介したい方がありますが、特にアメリカ、ハワイ、カナダの留学生五人が来てくれて居ります。とり敢えず紹介します。

先ずカナダ政府から派遣されて留学されている生田君、開教使です。お父さんが永らく、三十年間もカナダのバンクーバー開教使、その御令息。あちらの大学も出て、京都大学もかねて出られ、今度カナダ政府から派遣され三年間留学、恐らく将来カナダの仏教々團に生田君は無くてならん人で、非常に大事な方です。

その隣りに居られるのは安孫子君、（拍手）現在御尊父はカリホルニヤの首都サクラメントの輪番をして居られ

先生の感化の影響が残つておる。先生は二十六七才から三十一歳までアメリカ、ハワイに居られた。開教使の先駆者であります。日本人の中には入つて仏法をひろめられる。お寺が出来たら外の人に譲つて去る。三十一歳で帰られた時は本当に力尽きてホノルルから引上げられたのですが、帰る時何と言わたか、皆様から沢山お寺を建てて頂いてと功績のように言われて先生は非常に淋しかったと。お寺を建てるとは難しいことではない、一番心残りするのは、法を聞く人、眞美の信を身につけた人が何人居るだろう。これは八十一才になっておる前田老人が涙ながらに申されたことです。

前田さんに先生は、一番大事なことは身をもつて法を聴くことだと。このお言葉、沢山の寺を建てるのも大事だが法を聞く人が一人でもと。この言葉が非常に印象的であります。

このお話を承つて、アメリカ、カナダ、ハワイの仏教のことを考えざるを得ないわけであります。今日はお見えになれなかつたんであります。上田義文先生（伝導院長）と話し合つて、これをどうしたらよかろうか。会の最初に榎原先生の揮毫された歎異抄、あの中の「さいわいに有縁や」、有縁のという言葉、要するに誰か本物の人アメ

リカへ行つて貰わねばならぬのですが、上田先生の云われ

るに、誰がいいか、私、それは決つてゐる。と云うと上田先生は、花田先生かという。そうだ決つてゐる、だがあの病身ではなあ、と。

それに関連して、安孫子君は来年帰国、生田君も。浄円先生の言われた、実際開教使の方々、実は私は種々の因縁で此の秋から留学生の居られる和光寮で。話をさせて頂いておりますが、そこで名古屋の先生に電話して、実は行くべきであるが、幸に今日花田先生がお出でになると聞き、そこで今日留学生諸君がここへ参ることが出来たわけであります。

私、今日は紹介ばかりさせて頂きました。ありがとうございました。



続く

眼の見える人は、職業の選択にも私共よりは自由が与えられている。自由は与えられてはいるが、それだけに若い間は自分の現在ある地位や職業に不平不満をいだいて迷うことが多いとおもう。

その点は私共盲人はしやわせであると云う。私達は唯この道を行くより外はない、迷つたりする余地はない、ただまっしぐらにこの道を進んで行こう。その一念が私を今日あらしめてくれたといえるのである。

### 盲人のよろこび

宮城道雄

職業になりきつてゐる美しさ 吉川英治  
職業に貴賤はない。どんな職業に従事していても、その職業になりきつてゐる人は美しい。八百屋ものをかついでいる人も、街の辻に坐つて靴みがきをしてゐる人も、その職業になりきつてつとめている姿は、ほんとうに美しい、仏教で云う「三昧」の姿である。

その働く人の後に、年寄りを養つたり、子供を育てたり女房子供をいとおしんでいたりする。みんながそれぞれの生活を持っているのだと思うと、見ているだけで涙が出てくる。

私は地道に学歴もなく独学でやつてきた。座右の銘といふのではないが「われ以外は皆師なり」と思つてゐる。

## 歎異抄愚考（三）

杉 藤 美 代 子

過日大字氏に解説してほしいと言われた部分は、十三条本願ぼこりのくだりであります。私は何げなく解説しましたが、大字氏のように四十年來教えを聞き、書物を読んでられた方が「そうはすなおに読めぬものだ、ありがたいことだ」と非常に感に入った様子であられました。私はちょっととふしきに思つた。それが頭にあってこの第二十二条「本願」ということを調べる時、ふと本多顕彰著の歎異抄入門を拾いよみしてみました。その十三条の本願ぼこりです。そこに唯円の信仰が、親鸞の信仰と本質的にちがうとのべられ「章全体を通じてもう一つ氣になることは、ここで言われている『悪』が罪悪感につながつていらないよう見える点である」とあり、その前には、「本願ぼこり」の意味を「弥陀の本願に甘えて、したい放題悪を行なう」これが親鸞の使い方で唯円もその意味でも使つてゐるが、又もう一つ「本願ぼこりがなぜ悪いのか」と言つてゐる場合は、「本願を誇りにし、頼りにする」と言う意味で使つてゐるとある。

しかし、この二つは同一のことであります。弥陀の「本願——一切の衆生を救濟せば、正覺をとらじとの願いそれを、いいことにして悪をせんとするも、又それがわかつたからおれはえらいんだとすることも、大きな目からごらんになつたら同じことです。唯円房は決して混線していません。それだから偉大なんです。「本願を誇りにし、頼りにする」それゆえの罪、そういうもの一切を含めての救いでなければ、本当の救済にはならないのではないでしょか。本願に甘えてしたい放題することはいけないと力むことさえ自力であります。

本多氏のその項目は「慈悲に甘えるな」となつています。そこに自力が見えるわけです、然し眞実甘えさしでもらうのであります。かしこぶりを外に示してうちに虚偽（こけ）をいだくことこそ戒められたのであります。これが聖人の思想であります。

「親鸞在世のころにも、悪人成仏の法を聞きちがえて、悪をなすほど成仏がたしかになると考へて、わざと悪

を行なうものがあつた。たとえば、仏壇の前で人妻を抱くといふようなことをして風紀をみだすものもあつたということだ。

(2) 殺人といふような大惡でないにしてもこんなことをしては門徒の評判を悪くするばかりだ。それで、親鸞も心配して「薬はある。毒を好んではならない」と戒めた」とある八百二十頁▽即ち、(1)点線の部分がすでに自力、わがはからいなのであります。(2)悪に位をつけることと他力の主旨どちがいます。その根本をつかないと罪の本質がわからなくなる(ではこの問題をどう考えるか、後にゆずることにします)

えらい方々の解説なるものが、えらい故に、すでに自力の角度ばかり自立つのはなぜか。ここに第二条を説かれた「意味」があるようです。

さて、この解説を書く必要が、きょうはつきりして来ました。「薬はある。毒を好んではならない」これも解釈の間違いで「薬があるから毒を好め」というようなことはあるはずがないと思われます」と、こうです。

本論にはいります。「弥陀の本願」です。いよ／＼頼る本がありません。常観先生のも、今としてはむづかしうぎ、仏法のにおいに一般としてはついてゆけなぬ所があります

人は言います。或日、城外に出られて、杖をひく老人を見られ、葬式の列を目にし、人の死という現実を知られた。それが動機となつた、と。このことは私も幼い時、聞いたことがあります。——私も老人を絶えず見、葬列も見たことがある。それなのに釈尊だけがなぜ山に入られたただろう。それは私のおぼろげな疑問でありました。今の私の年令では死はかなり現実の問題として感じられます。どんなに家族を愛し、自分をいとおしみ、生きることへの執念が燃えていようと、やがて引き裂かれる時がくる。一個の死は人類の滅亡、地球の破滅と同価のものである。なぜなら死によって、永遠に消滅し、地球の存続も、人類の繁栄もその人にとって無であるから。こう考えてみると、老・病・死といふもの、切なさ、やり切れなさ、むごさ、まことに言語に絶するものであります。その認識を、自己の物と感じることは若者の限界外でありましょう。生命力が、それを後へおしやるからであります。然し釈尊は二万台で、老人の実感をすぐに認識しました。人間が四十年も五十年も歩いてたどりつくつかぬ行く先をしかと見すえたところに釈尊の偉大さが先ずあります。

その釈尊の、自力苦行は己れの能力の限界の試練でありましよう。この強さは、凡俗のわれらが考えて及ぶものではないと思われます。(印度では現在もなお釈尊と同じ苦

ます。私に、学がなさすぎるのです。(但しこのご本は、本当のことが書いてあります)

### 第二条その三、つづき

弥陀の本願まことにおわしまさば云々。弥陀の本願とは「五劫思惟(こうしゅい)の願」といって「永劫の間一刹那も休むときなく、われらのために苦行なさつた清淨真実の親心」(常観先生のご文を易くしたもの)で聖人は「教行信証」の行の巻に他力というは如來の本願力であるとのべて居られます。

弥陀の本願とは、一切の衆生(人間、生あるものすべてに恵みはあまねく)を「この生あれば死あり、この悲しみ喜びに一喜一憂し、おのれがおのれがと自己を主張し(生きるという本能)そしてやがてはすべて無に帰し土にかえろうとするこのかなしさ、あわれさ」——これをかわいそりである、ああ無理もない、として救わざばやまずとのねがいを立てられる。その願い救済が、われら気づくと気づかぬにかかわらず、絶えずぶりそいで、人生の折々に光り輝く。それは、手にとつてこれを示すことできぬものなれど、これを仰ぐ以外に、してみようのないことを釈尊は教えられました。

釈尊は、マカダ国王子として何不自由のない身分に生まれつきました。その彼が、なぜ山に入られたか。後世の行為をめざして行なう人があると、グプタ氏から伺つたことがあります。」

その釈尊はやがて、一条の光明に夜が明けます。一女性の捧げる牛乳をのみほされます。他の一切受けつけないで自己の限界をためそうとする苦行から、他をうけいれすべてを包容しようとする救済への志向、それへの転身であります。後にのべる往相廻向と還相廻向の問題にも関係あるうと思われます。

釈尊の説法については觀無量寿經にある韋提希夫人の物語りが必要となりましょう。段々にのべさせてもらいます。

釈尊の説法が眞実なら中国の善導大師の説法は、又眞実であろう……法然……親鸞と、こう論じて来る。この論旨は前述の如く、まことに理路整然。しかし、現代のわれらの目からすれば、この論は反対ではなかろうか、ということになります。なぜなら「弥陀の本願」というわけのわからぬもの(実体のないもの)が論の出発になつてゐる。そこがわからぬ、それゆえにそれは論をすすめる方向であるべきが、「弥陀の本願まことならば」と仮説の出発になつてゐるからです。私の実感から言っても反対のように思われます。私は近角常音先生からお話を伺つて、常音先生の言われる光明といふようなものに感づかしてもらつた。私に

とつて常音先生のおことは実感であります。常音先生ののことばを信じるということは、常音先生の信心が常観先生からいただかれたもので、それは親鸞さま、それは法然さま、善導（私としては実感がないから「さま」ともつけられない）ともかく大へんなえらい方と、さかのぼって釈尊に至るわけであります。その釈尊の仰がれた弥陀の本願というものを、やむえず信ぜずに入れぬ立場になります。私にとってこの一筋のつながりに立つ方々は同一であります。常音先生は弥陀であります。

こういう実感からすれば、正に逆な、この論旨は、否定されるべきものでしようか。私は間違っているかも知れないとがこう考えます。

十余ヶ国をこえ、身命を堵して聖人のもとに来た人々は仏説を問い合わせるために参った人々であります。この人々は頭から弥陀を信じる（信じ方に色々あるが）ことから出発している。要するに他力本願をいただくだけぬが問題であつて仏教に対する疑念から出発しているのではないかであります。はじめに「往生極樂のみちを問い合わせためなり」とあるとおりです。

そういう人を相手に聖人は「念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をも知りたるらんと、心にくく（知りたく）おぼしめして云々」と説いています。

## 仏光を身にうけて

花田正夫

淨土和讃に、仏の光明の徳をたたえられ、無辺光のところに、「光触（こうそく）」の左訓に「ひかりをみにふるるというところなり」とあり、

「光沢（こうたく）」の左訓に「ひかりにあたるゆえに見えのいでくるなり」とあり、そのほか色々と同じ意味のことなどが述べられている。

私は、この左訓を凝視して、いかにも聖人が仏の光明を御身にまざくとおうけになつている姿に心うだれた。

次に、歎異抄には、聖人と圓房が仏法を身読、体解されてゐるのに驚き、そのお言葉をひろいあげよう。

第二条に「自余の行をはげみて仏になるべかりける身が」、いづれの行もおよびがたき身なれば、「愚身が信心におきては云々」

第十二条に「いやしからん身にて往生はいかが云々」

第十三条に「一人もこの身の器量にてはころしつべしと

### 山岡鉄舟と三遊亭円朝

谷田左右一

天竜寺の涌水老師が江戸を巡錫の時、世間からさわがれていた円朝を呼んで鉄舟居士とその落語を聞いての評に「あんたの話は大変うまいが、然しみな舌先きの話じゃ、その舌を離れねば本当にうまいとは云われぬ」

と。得意だった円朝が不満の色を見せる、側に居た居士が「今あんたの舌を抜いたらどうする」と詰問した。円朝は顔色をかえて「私の今日あるは此の舌のお蔭でがあるこの舌を抜かれたら飢死するだけです」と答えた。すかさず居士は「だからあんたの話は舌先きじや」と叱責し「自分の剣道は無刀流である」と、その奥儀を順々と論じた。

初めて円朝も発心して求道参禪し、その妙處をさとつて

「無舌居士」の号を禅師から授かった。やがて名実共に斯界の名人と譲えられたが、彼の臨末の遺言は「鉄舟居士の墓前に、恰も居士を拝む位置に墓を建てよ」と頼んだ。

もおぼえず候」、「かかるあさましき身も本願にあいたてまつりてこそげにほこられ候え。さればとて身にそなえざらん悪業は云々」、唯信抄にも「……罪業の身なればすぐわがたしとおもうべき云々」

第十五条に「煩惱具足の身をもちすでにさとりをひらく」ということ、「この身をもてさとりを……」

総結文に「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを」、善導の、「自身は罪惡生死の凡夫……出離の縁あることなき身としつ……」、「さればかたじけなくもわが御身にひきかけて、われらが身の云々」

更に、愚痴悲歎述懐和讃に「虚偽不実のわが身にて」、「奸詐（かんさ）ももはし身にみてり」、「小慈小悲もなき身、にて有情利益はおもうまじ」とあり

聖人の御絶筆の自然法爾章（じねんほうにしよう）の最

後の和讃にも

「是非知らず、邪正もわかぬこの身なり……」とある。

心に浮かぶままにあれこれとひろいあげたがこうした聖

人のお味わいを鏡として我身をかえりみると、如來世尊や高祖聖人方のおのこし下さった金言、実語を、ただ頭だけで読み、聞きして、わかつたつもりになつて、うわすべりしいることの軽卒さがうつし出される。仏法を学び、且つ聞きながら、砂糖をあつかう匙（さじ）同様に、甘味も香りも匙にはつかないよう、単なる智的の理解にとまつていることのあまりにも多いのに慚愧させられる。

こうした私の愚かしさをすこし数えあげると、悪と死の問題である。幼い頃から仏教の流布する国に育つた私は、「蒔かぬ種は生えぬ。爪の蔓には茄子はならぬ」と聞かされてゐるが、身勝手な者で、悪いことをしても、その責任を他にうつして、悪い報いには決して受けようとしない。また出来るだけなまけておいて、立派な結果を得たいのが私の本音である。

又人生は無常である、月に群雲、花に風の諺通りに、夕べの鐘の音にも、そのはかなさを知らしながら、何時まで死なぬ積りになり、たとえ病氣しても極力死を拒否し続けている。生のある限り死はのがれられぬと理屈では知つても、情意の世界ではうなづくことは出来ぬ。生は受けとっても、死は受け取らない、身びいきの心しか持ち合せていない、これでは健全な常識とは云えない。

昔の説話に、富子という福々しい娘がいたので、嫁に迎

薩のさとりが進んで第八の位、不動地に到達してはじめて

「凡夫地を脱するが故に凡夫と知る」とある、恰も、夢が

さめて夢と知らされると同様である。それは菩薩の修得し

た仏の智慧のはたらきで、無道心の泥凡夫の私共には不可能である。

私は病識のない狂人のように、自分自身では自分をどう

することも出来ない、唯向うからさしのべて下さる御手が

なければ、いつかはどうにかなれようとの夢にいつまでも

うかれて、はてしなくのたち廻るばかりである。幸にも

法藏菩薩の願力によって、智慧の念仏を身に頂き、信心の

智慧のひらかれたよき人々が居られる日本に生れている私

共はまことにありがたいことである。この方々は我身にひ

きかけて、私共のこの苦惱をことごとくよく知りつくされ、そこに無限の大慈悲心をもつて、くりかえしまきがえし救いの御手をさしのべて下さる、それは私共が求めるか

らではなく、否むしろ求めることさえ知らぬことまでを知り抜かれてのやむにやまれぬ大悲心の發動である。

親鸞聖人はよき人法然上人との出合いをよこばれて

智慧光のちからより 本師源空あらわれて

淨土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう

えたら、その妹の貧子が度々訪ねて来て、家の財産をなくして行くので、とうとう富子をも離縁したというのがあるが、私共の我儘な、愚かさをきびしく教えられる。

儒教では「論語読みの論語知らず」と單なる頭だけの理解をいましめている。このことは誰しも知つてゐるが、本当には知る力がない、気儘で横着な身は、そういうことを受けつけない。石川啄木の歌に

悲しきは、飽くなき利己の一念を

持てあましたる男にありける

とある。ここまで来ると万事休す、絶体絶命である。聖人は御自身を、「いしかわら、つぶてのごとくなるわれら」と唯信鈔文意にのべていられるが、全く仏法氣の微塵もない、無道心の身であると照らし出される。

近角先生は「一分一厘眞実に近づけぬ身」と云われ、福島先生は「自分はそう思いたくないが、五逆よりも誇法よりも、むしろ一番ひどい断善根の衆生と呼ばれる闘提（せんたい）」に自分を見出す」と云われている。

善導大師の「頭燃を灸（はる）うがごとくすれども虚偽の行なり、雄毒の善なり、眞実の行と名づけざるなり」の仰せは、前聖、後賢その軌を一つにさせて、私共の姿のありのままをうつし出して下さる智慧の鏡である。

あゝしかしながら、凡夫には凡夫の自覚は出来ない。菩

薩劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき  
本師源空いまさずは このたびむなしくすぎなまし

と渴仰されている。その法然上人はまた「ひとえに善導に依る」と云われ、支那と日本のへだたり、数百年の時の差を持たれながら、追慕のあまり、有名な二祖対面の夢をあり／＼と感得していられる。

「いたりて堅きは石なり、いたりて柔かなるは水なり。

水よく石をうがつ云々」

と蓮如上人は注がれてやまぬ大悲心をたたえられて、我

身は堅い石ころ同様の身と述べられている。

かくて菩薩の智慧など持ち合わせぬ身も、よき人の導き

を蒙って煩惱熾盛の凡夫と信知せしめられ、すみずみまで

入り満ちて下さる大悲の光明に慶喜せしめらるのである。

## 慈光を身にうけて 花田正夫著

仏徳の讚仰、人生と信仰、信の旅行く人々

定価 三五〇円 送料 五〇円

発行所 京都市下京区堀川通花屋町、百華苑

振替 京都二五七八八番

# き と あ



例年のように五月が来ると、山頭火の匂  
分け入つても分け入つても青い山  
を掲げて、底のない深さ、永遠なるものに  
触れる喜びを覚えております。

又、本年は、大垣の渡辺種彦さんから、梁  
階筆の禅宗の「六祖（慧能）竹を切る図」の  
模写の色紙を貰つたので、壁に掛けて、無言  
の説法を聴いていると、口舌の仏法にとどま  
り、観念論にうわすべり易い自身を省みさせ  
られ、念佛のお催促をうけております。「よ  
しあしの文字をも知らぬ人はみなげことのこ  
こなりけるを」とはかかる人のことであろ  
う。

人生の光のある面ばかりを見ている者  
が、やがて蔭影を見出す時、悲觀し絶望する  
のは誰しものがれられないことであります。

しかしそこを出発点として、眞実の教を聞  
き、心の闇の破られるところ、再び人生に帰  
つて夫々の活動をさせて頂く道もひらける。

近角先生はそのことを詳細にお知らせ下さつ  
たのであります。

福島先生から御懇書を頂き「慈光誌に寄稿

のことを色々考えて居りましたが、十五年ほど前から色々雑誌に書かせて頂いた小品、何れも仏教の心持を基調としましたものが二十あまり溜つて居ります。これを『求道と知

性』という題のもとに今一度皆さんに読んで  
いただきたく云々」とのこと、まことにあり  
がたいことであります。本月はその第一とし  
て「菊花のおもいで」を頂きました。

一道会の記は、本年は詳細な原稿を頂きま  
したので、次号にも續けさせていただきま  
す。

杉藤さんからは、近角先生聞書を、近く御  
送り下さる由で、これもまことに嬉しく心待  
ちしております。常音先生の徳音に御忌月ま  
でに浴させていただきましょう。

## 御案内

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半  
新郷通一丁目下車  
南区駄上町二ノ八八。市電、  
市バス、北山町下車

○毎月二十四日。午前午後。教西寺  
法話会

昭和区小桜町。市電、御器所通り下車  
市バス、北山町下車

定価	半 年	三百五十円	(送共)
	一 年	五百円	(送共)
編集・発行人	名古屋市南区駄上町二ノ八八	花 田 正 夫	
印 刷 人	愛知県西加茂郡三好町大字福音	電話八二一局七〇三七番	
振 行 所	名古屋市南区駄上町二ノ八八	吉 野 穂 志 郎	
郵便番号	四 五 七	一〇四七〇番	